

## 〈新刊紹介〉

### 澤崎文著『古代日本語における万葉仮名表記の研究』

本書は、ある文字の周囲や直前・直後にどのような文字が置かれているかという「表記環境」という独自の概念を用いて、漢字仮名交じり表記に焦点を当て、古代日本語における文字把握と文字使用の一端を明らかにするものである。そのことにより、古代の人々が文字を使ってどのように日本語を書きあらわしていたかについて明らかにすることを目指している。筆者が早稲田大学に提出した博士論文「上代日本語における仮名表記の研究」をもとに、その後の研究成果を加えまとめたものである。

構成は次のとおり。「序章」「第一部 表記環境と文字」（「第一章 『万葉集』の訓字主体表記に見える二種の音仮名」「第二章 万葉仮名の使用に影響を与える表記環境」「第三章 表記環境から見た音仮名と訓仮名の区別意識」「第四章 表記環境から見た『古事記』の万葉仮名）」「第二部 文字選択の方法」（「第五章 万葉仮名の字義を意識させない文字選択」「第六章 『古事記』における漢字の音仮名用法と訓字用法の関係」「第七章 『万葉集』における漢字の複用法と文字選択の背景」「第八章 漢字の表意性から見た「かな」の成立）」「第三部 表記意識の継続と消失」（「第九章 『新撰万葉集』から見た『万葉集』の表記」「第十章 『続日本紀』宣命の清濁書き分けと失われた表記意識」「第十一章 四国史宣命の清濁書き分けと表記の踏襲）」「終章」。末尾に「引用・参考文献一覧」「初出一覧」「あとがき」「索引」を付す。（阿久澤弘陽）

（2020年2月12日発行 塙書房刊 A5判縦組み 314頁 8,000円＋税 ISBN 978-4-8273-0134-2）

### 竹田晃子著『東北方言における述部文法形式』

本書は、従来の方言研究において体系的な論述が充分ではなかった東北方言の文法現象、その中でも特に述語形式がかかわる現象を取り上げ、実態の把握とその通時的な成立を解明することを目的とするものである。日本学術振興会科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の助成を受けて刊行された。

構成は以下のとおり。「第1章 方言における述部文法形式の研究にむけて」「第2章 東北方言の文法的特徴概説」「第3章 自発表現形式サルの意味用法」「第4章 自発表現形式の分布と変化」「第5章 可能表現の体系」「第6章 可能表現形式の分布と変化」「第7章 タッタ形の意味用法」「第8章 ケの意味用法」「第9章 ケのテンス的機能」「第10章 テンス・アスペクトの体系」「第11章 テンス・アスペクトにみる属性差・地域差」「第12章 テンス・アスペクトの変容」「第13章 本書の成果と今後の展望」。巻末に「参考文献」「本書と既発表論文との関係など」「あとがき」「索引」を付す。

なお、本書は、著者が2012年度に東北大学大学院文学研究科に提出した博士論文の

一部に基づくものである。(田中佑)

(2020年2月20日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 304頁 8,000円+税 ISBN 978-4-8234-1012-3)

### 土屋智行著『言語と慣習性——ことわざ・慣用表現とその拡張用法の実態——』

本書は、言語の創造性を動機づける社会・認知的基盤としての慣習に、定形表現の拡張用法の観察と分析から迫るものである。観察・分析に際して、認知意味論、認知文法を理論的枠組とした作例による手法と、辞書記述やコーパスを用いた量的・質的分析の手法をとっている。本書では慣習を単純に社会的なものではなく、個人的な知識としても捉え、それぞれの慣習の相互作用についても論じている。

構成は次のとおり。「まえがき」「第1章 定型表現と認知のかかわり」「第2章 言語学における定型表現の流れ」「第3章 慣用句の意味的なゆらぎ 修飾関係と文脈の観点から」「第4章 慣用句とことわざの形態的・意味的傾向」「第5章 定型表現の拡張用法」「第6章 コミュニケーションと記憶」「第7章 おわりに 定型表現研究の精緻化に向けて」。末尾に「参考文献」「索引」を付す。(阿久澤弘陽)

(2020年2月20日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 152頁 4,200円+税 ISBN 978-4-834-1010-9)

### 新野直哉著『近現代日本語の「誤用」と言語規範意識の研究』

本書は、著者が前著『現代日本語における進行中の変化の研究——「誤用」「気づかない変化」を中心に——』(ひつじ書房, 2011年)以降に書いた論考の一部を一書にまとめたものである。辞書や「日本語本」等の記述により「誤りである」という意識が社会一般に相当程度定着しているような使い方としての「誤用」、ならびに、国語学研究者や「ことばの乱れ」に関する著作を発表するような日本語に関心の深い人々でさえほとんど気づいていない意味変化である「気づかない変化」の実態とそれにかかわる言語規範意識に関する、豊富な用例に基づいた考察が展開されている。

「はじめに 本書の目的と概要」「序章 「誤用」・言語規範意識について」に続き、「I 副詞“全然”をめぐる言語規範意識について」として「第1章 言語規範意識記述を日本語史研究資料としてどう考えるか 2人の研究者の“全然”をめぐる記述を例に」「第2章 “全然”に関する国語学者浅野信の言語規範意識 昭和10年代を中心に」「第3章 『青い山脈』(昭和22年)の「全然同意ですな」について 「変な軍隊用語」とは?」「第4章 平成期新聞記事に見られる“全然”に関する言語規範意識」, 「II 現代日本語の「誤用」「気づかない意味変化」の事例について」として「第1章 慣用句“気がおけない”の「誤用」について」「第2章 “世間ずれ”の「誤用」について」「第3章 “名前負け”の「誤用」について」「第4章 “嗚咽”の「気づかない意味変化」について 一般雑誌記事を契機とした言語変化研究の一例」, 「III 昭和期言語研究・言語規範意識研究のための新資料について」として「第1章 昭和前期の総合月刊誌における新資料

(その1) 「現代語考」(昭和10年)」「第2章 昭和前期の総合月刊誌における新資料(その2) 「語学者ばかりの座談会」(昭和11年)」「第3章 昭和10年代の国語学・国語教育・日本語教育専門誌に見られる言語規範意識」「第4章 新資料「ひまわり女学生新用語辞典」(昭和25~27年)について」を収録。巻末に「おわりに 本書をまとめるにあたって」「初出一覧」「参考文献」「索引」を付す。(田中佑)

(2020年2月20日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 304頁 6,500円+税 ISBN 978-4-8234-1011-6)

### 平田未季著『共同注意場面による日本語指示詞の研究』

本書は、通言語的な指示詞研究で導入された注意概念や会話の推意理論を用いて、新たな日本語指示詞の意味論的・語用論的分析を提示するものである。日本語母語話者間の自発的な相互行為場面をビデオ録画した映像データと、それを文字化したデータを主な分析対象としている。自発的な相互行為の中で眼前の対象に共同注意を確立するために言語情報・非言語情報がやりとりされる場面を共同注意場面と呼び、そこでの指示詞の用いられ方を詳細に記述し、指示詞の新たな意味的特徴と使用の実態を明らかにしようとするものである。筆者が2015年度に北海道大学大学院国際広報メディア研究科に提出した博士論文「注意概念と推意理論を用いた日本語指示詞の統一的分析」とその前後に公開された論文を加筆修正したものである。

構成は次のとおり。「Ⅰ 指示詞と共同注意」(「第1章 指示詞とは何か 共同注意場面における指示詞の重要性」「第2章 本書の分析の枠組み 注意と会話の推意を用いた指示詞分析」)、「Ⅱ 日本語指示詞の意味論的分析」(「第3章 注意概念を用いた「中距離指示」のソ系の再分析」「第4章 ソ系の外部照応用法と内部照応用法の統一的分析」「第5章 無標のコ系と有標のア系 会話の推意理論を用いた指示詞分析」「第6章 注意概念と会話の推意理論を用いた日本語指示詞の体系化への展望」)、「Ⅲ 日本語指示詞の語用論的分析」(「第7章 共同注意場面の構造と指示詞選択のダイナミクス」)、「第8章 おわりに」。末尾に「参考文献」「あとがき」「索引」を付す。(阿久澤弘陽)

(2020年2月20日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 244頁 6,400円+税 ISBN 978-4-8234-1014-7)

### 林淳子著『現代日本語疑問文の研究』

本書は、統語構造や文法形式では捉えがたい日本語疑問文がどのように規定できるかを、典型的な疑問文である質問文を対象に、文法構造が疑問文の内容面と言語行為面をいかに結びつけているかを論じることで明らかにしようとするものである。筆者が2017年3月に東京大学大学院人文社会系研究科に提出した博士論文である「現代日本語の疑問文および質問表現に関する研究」に修正が施されたものである。

構成は次のとおり。「序章」「第1章 疑問文・疑問表現研究史」「第2章 疑問文の分類」「第3章 ノ有り疑問文の構造」「第4章 ノ無し疑問文と代弁的質問」「第5章

Wh 疑問文における「ノ」の有無」[第6章 ショウカ疑問文の異質性][第7章 ショウカ疑問文の近代語性][終章][附章 疑問文と終助詞]。末尾に「初出」「あとがき」「出典・調査資料」「参考文献」「索引」を付す。(阿久澤弘陽)

(2020年2月27日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 264頁 3,700円+税 ISBN 978-4-87424-823-2)

### 田窪行則・野田尚史編『データに基づく日本語のモダリティ研究』

多様な言語データに基づいて、多角的・総合的な観点から日本語のモダリティ研究を開拓しようとする論文集。2018年12月15日・16日に東京証券会館で行われたNINJALシンポジウム「データに基づく日本語研究」での2つのワークショップがもとになっている。タイトルの「データに基づく」は、国立国語研究所が作成しているコーパスなどのいわゆる言語資源を活用したもの、あるいは、実験データに基づくものという意味で用いられている。

日常会話コーパス、諸方言コーパス、通時コーパス、学習者コーパスなどのコーパスデータに基づいて日本語モダリティの諸相を明らかにする「コーパスに基づく日本語モダリティ研究」と、文法、音声、対照研究、脳科学などの視点からそれを明らかにする「多角的な視点から見た日本語のモダリティ研究」の二部構成。第一部は、「第1章 日常会話コーパスを活用した丁寧さ・対人モダリティの生起要因とその実態の解明(小磯花絵)」「第2章 書き言葉コーパスに見られる「てもいい」の用法——頻度とコロケーションを考慮した文法記述——(中俣尚己)」「第3章 諸方言コーパスに見るモダリティ形式のバリエーション——推量表現の地域差——(木部暢子)」「第4章 通時コーパスに見るモダリティ形式の変遷(小木曾智信)」「第5章 学習者コーパスを活用したモダリティ研究——日本語学習者の「かなと思う」の発達——(迫田久美子・佐々木藍子・細井陽子・須賀和香子)」「第6章『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対するモダリティアノテーションとその分析(松吉俊・浅原正幸)」の6章で構成される。第2部は、「第7章 モダリティとイントネーション(窪蘭晴夫)」「第8章 条件付き命令・依頼文——日本語条件文のモダリティ制約再考——(有田節子)」「第9章 名詞修飾表現から見たモダリティ(益岡隆志)」「第10章 主題・とりたて表現とモダリティの呼応——日本語とスペイン語の対照研究——(野田尚史)」「第11章 脳科学から見たモダリティ——コーパスと事象関連電位計測から見た証拠性とモダリティの意味的差異——(原由理枝)」の5章で構成される。末尾に「编者・執筆者紹介」を付す。(阿久澤弘陽)

(2020年3月22日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 228頁 3,400円+税 ISBN 978-4-87424-828-7)

### 鈴木豊著『日本書紀声点本の研究』

本書は、アクセント資料としての『日本書紀』声点本の資料価値を見極め、その成立過程を明らかにし、それを踏まえて、平安・鎌倉時代の京都アクセントに関する問題について考察を行っている。文京学院大学平成31年度出版助成金の交付を受けて刊行さ

れた。

「はしがき」「凡例」「序論」に続き、「第Ⅰ部『日本書紀』声点本の資料価値に関する研究」として「第1章『日本書紀』神代巻の声点」「第2章 乾元本紀所引『日本紀私記』の声点について」「第3章 乾元本『日本書紀』万葉仮名訓の声点」「第4章 岩崎本『日本書紀』の声点」「第5章 訓読漢字の声点のアクセント表示法」「第6章『日本書紀』被訓注字の声点」「第7章『古語拾遺』の声点」「第8章『日本書紀』声点本の濁音表示」「第9章『古語拾遺』声点本の濁音表示」「第10章『日本書紀』 $\alpha$ 群の万葉仮名——原音声調と日本語アクセントとの対応——」,「第Ⅱ部『日本書紀』声点本の成立過程に関する研究」として「第1章『弘仁私記』序の「以丹点明輕重」」「第2章 乾元本紀所引『日本紀私記』の万葉仮名」「第3章『日本書紀』古写本中の万葉仮名表記の和訓」「(付)『日本書紀』古写本中の万葉仮名訓語彙索引」「第4章『和名抄』所引『公望私記』の万葉仮名訓」「第5章 延喜『公望私記』の構造」「第6章 日本紀講書とアクセント」,「第Ⅲ部 平安時代京都アクセントに関する研究」として「第1章 和語声点資料の差声方式」「第2章 助詞「の」のアクセント」「第3章 アクセント史研究における拍内下降」「第4章 平声輕点の消滅過程」「第5章 アクセント体系大変化の要因」「第6章『金光明最勝王經音義』所載「以呂波」のアクセント」「第7章 いろは歌の作者について——いろは48字説の検討——」,「結論」を収録。巻末に「参考文献」「あとがき」「初出一覧」を付す。(田中佑)

(2020年3月25日発行 勉誠出版刊 B5判横組み 464頁 14,000円+税 ISBN 978-4-585-28048-4)

## 日本近代語研究会編『論究日本近代語 第1集』

広義近代語(室町時代以降の日本語)に関する日本語学的な研究を中心に、隣接領域である他言語との対照研究や日本語教育などに関する25編の論考が収められている。

構成は以下のとおり。「連語から見た『徒然草』第1部・第2部——接続機能表現のプレ近代化と文体——(安部清哉)」「キリシタン版辞書での同音異義と一語多義(豊島正之)」「キリシタン版『日葡辞書』「序文」の二重印刷に見る編纂方針について(中野遙)」「ミギテの通時的考察——〈右の手〉〈右の方〉を表す周辺語句の変遷との関わりを中心に——(木川あづさ)」「『雑字類編』の書き入れ語——『福惠全書』との関連を巡って——(荒尾禎秀)」「『語学新書』における格理解——国学の言語研究をどのように取り入れたか——(服部紀子)」「明治期の漢字の「かたち」について——『天変地異』を資料として——(今野真二)」「『世界商売往来』の依拠資料について(丸山健一郎)」「『[校正/増補]漢語字類』における漢字字形のバリエーションについて(内田久美子)」「日本における「ウラジオストク」の漢字表記(シャルコ・アンナ)」「『言海』校正刷における漢文字体/字形について(小野春菜)」「『續々金色夜叉續編』・『新續金色夜叉』の四種本文対照——『讀賣新聞』,『新小説』,『紅葉全集』,『七版續々金色夜叉』——(許哲)」「日本統治期台湾の初等国語教科書における一人称代名詞——国定教科書と

の比較を通して——(山田実樹)「テキストアナリシスによる明治期日本語教科書『日語活法』の検証(伊藤孝行)」「宏文学院の日本語教師編纂の会話教科書における謙讓表現——『東語会話大成』を中心に——(薛静)」「台湾の日本語教育月刊誌『国光』(昭和7年創刊)における投稿文の資料性——誤用と誤文訂正を中心に——(園田博文)」「日仏オノマトペの対照——宮沢賢治『セロ弾きのゴーシュ』と *Gauche le violoncelliste* ——(瀬川愛美)」「上田万年をマンネンと呼ぶは礼か非礼か——近代日本における〈名の字音読み〉習俗の人称——(三浦直人)」「[わりに]」「割合に」の歴史の変遷——接続助詞用法と副詞用法の関連を中心に——(川島拓馬)」「丁寧体否定形式「～ませんです」の動向——「国会会議録検索システム」を例に——(神作晋一)」「日本語教育における授受表現の効果的な教え方とそこに見る日本人の「ウチとソト」感覚(木下哲生)」「現代語における接続助詞の用法のトコロろについて(佐伯暁子)」「職場の会話における副詞の使用——職場談話コーパスを調査資料として——(呉雨)」「[なるほど]考——応答表現としての意味・用法——(苅宿紀子)」「現代語の副助詞デモの各用法について——いわゆる「謙歩」「極端」と「例示」の関係について——(星野佳之)」。巻末に「索引」「執筆者一覧」「編集後記(編集委員会)」を付す。(田中佑)

(2020年3月25日発行 勉誠出版刊 A5判横組み 424頁 15,000円+税 ISBN 978-4-585-28521-2)

### 小椋秀樹編, 小椋秀樹・富士池優美・宮内佐夜香・金愛蘭・柏野和佳子著『コーパスで学ぶ日本語学 日本語の語彙・表記』

本書では、様々な大規模コーパスの構築・公開によって盛んになっている語彙や表記に関する研究における基本的事項、専門的事項が解説されている。語彙、表記に関する学習に主眼を置いているため、検索や集計の方法に関する記述は最低限に抑えられているが、その代わりに詳しい解説資料を掲載したウェブサイトが用意されている。加えて、具体的なテーマが扱われた章は導入、例題、解説、演習で構成されており、実習形式による段階的な学習が可能となっている。

構成は以下のとおり。「第1章 総説(小椋秀樹)」「第2章 語彙の量的構造(富士池優美)」「第3章 語形と意味(宮内佐夜香)」「第4章 語種(金愛蘭)」「第5章 和語・漢語の表記(小椋秀樹・柏野和佳子)」「第6章 外来語の表記(小椋秀樹)」「付録(小椋秀樹・金愛蘭)」。巻末に「索引」を付す。(田中佑)

(2020年5月1日発行 朝倉書店刊 A5判横組み 160頁 2,400円+税 ISBN 978-4-254-51652-4)

### 田中牧郎編, 田中牧郎・鴻野知暁・須永哲矢・池上尚・渡辺由貴・市村太郎著『コーパスで学ぶ日本語学 日本語の歴史』

本書は、従来の日本語の歴史に関する教科書では編集者が行うことが前提であった「用例を取り出して観察する」という作業を、読者自身がコーパスを用いて行うことで、その面白さを実感しながら日本語学に関する知識と方法を学んでもらうことを目的とし

たものである。具体的なテーマが扱われた章は導入、例題、解説、演習で構成されており、実習形式による段階的な学習が可能となっている。

構成は以下のとおり。「第1章 コーパスでとらえる日本語の歴史(田中牧郎)」「第2章 奈良時代(鴻野知暁)」「第3章 平安時代(須永哲矢)」「第4章 鎌倉時代(池上尚)」「第5章 室町時代(渡辺由貴)」「第6章 江戸時代(市村太郎)」「第7章 明治・大正時代(田中牧郎)」「付録 『日本語歴史コーパス』利用の基礎(田中牧郎)」。巻末に「索引」を付す。(田中佑)

(2020年5月1日発行 朝倉書店刊 A5判横組み 192頁 2,700円+税 ISBN 978-4-254-51654-8)

### プラシャント・パルデシ・堀江薫編『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』

本書は、日本語とアジアやアフリカ諸語における名詞修飾表現の対照研究を行い、日本語の名詞修飾表現の類型論的な位置づけを解明すること、言語はどのような要素で名詞を修飾するのか、そしてそれはなぜかという根源的な問題を追求すること、という二つの目的のもとに行われた研究の成果をまとめた論文集である。26編の論文を収録する。2016年4月から始まった国立国語研究所の機関拠点型共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」の「名詞修飾表現の対照研究」班における共同研究の中間段階の成果として編まれた。

「Ⅰ 東アジア言語」「Ⅱ 北東・中央アジア言語」「Ⅲ 東南アジア言語」「Ⅳ 南・西アジア言語」として地域別の四部構成。各部の収録論文は次のとおり。「主題構文としての日本語の名詞修飾節構文(益岡隆志)」「日本語の相対名詞連体修飾の意味的特性(大島資生)」「中級日本語学習者の名詞修飾節使用における母語の影響(大関浩美)」「日本語を母語とする幼児による「ノ」の過剰一般化——修正属格仮説——(木戸康人)」「韓国語の直接引用修飾節に関する一考察(金廷珉)」「ダバ語の名詞修飾表現と名詞句標識(白井聡子)」「ゾゾ語(若柔語)の体言化と連体修飾構造(宮岸哲也)」(以上「Ⅰ 東アジア言語」収録論文)、「コリヤーク語における関係節構造——名詞句接近可能性階層及び主名詞配列タイプに着目して——(呉人恵)」「サハ語の連体修飾節——内容節での補文標識挿入に関する日本語との対照——(江畑冬生)」「現代ウイグル語の名詞修飾節について——形動詞節を中心にした考察——(新田志穂)」「キルギス語の名詞修飾節——日本語連体修飾節「内/外」の関係」の観点から——(大崎紀子)」(以上「Ⅱ 北東・中央アジア言語」収録論文)、「カパンパンガン語の名詞修飾——日本語の「内の関係」「外の関係」との比較——(北野浩章)」「クメール語の名詞修飾節(上田広美)」「クメール語の「外の関係」の名詞修飾現象——日本語との対比を通じて——(堀江薫・ハイ・タリー)」「トイウ補語節と waa 補語節——発話動詞起源の名詞補語節標識の日タイ対照——(高橋清子)」「ティディム・チン語の名詞修飾表現(大塚行誠)」「ジンポー語の名詞修飾表現(倉部慶太)」(以上「Ⅲ 東南アジア言語」収録論文)、「メチェ語の名詞修飾表現の体系と日本語との対照(桐生和幸)」「カトマンズ・ネワール語の名詞修飾(松瀬育子)」「伝統文法か

ら見たヒンディー語の名詞修飾——語彙的体言化に焦点を当てて——(西岡美樹)」「マラーティー語の名詞修飾表現——体言化理論の観点から——(ブラシャント・バルデシ・柴谷方良)」「シンハラ語の名詞修飾表現(岸本秀樹, Dileep Chandralal)」「スインディー語における名詞修飾の特徴(萬宮健策)」「テルグ語の名詞修飾表現(児玉望)」「ブルシャスキー語の名詞修飾表現(吉岡乾)」「アルメニア語の非定形名詞修飾表現の特徴——日本語・英語との対照を通して——(クロヤン・ルイザ・堀江薫)」(以上「IV 南・西アジア言語」収録論文)。末尾に「索引」と「執筆者紹介」を付す。(阿久澤弘陽)

(2020年5月12日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 565頁 8,800円+税 ISBN 978-4-8234-1036-9)

### 森山卓郎・渋谷勝己編『明解日本語学辞典』

日本語学の重要な概念および現時点での研究成果をわかりやすくコンパクトにまとめた辞典。先行する三省堂『明解言語学辞典』『明解方言学辞典』に続くものである。国語教育や日本語教育などの関連分野にも目配りされている。

「はしがき」「執筆者一覧」「凡例」「目次索引」に続き、約230の項目が採録されている。末尾に、音声器官図、IPA、方言地図、詳細品詞分類、敬語分類対照表、ローマ字による古典語・現代語対照活用表などを含む「付録」が付されている。(阿久澤弘陽)

(2020年5月30日発行 三省堂刊 B6判横組み 208頁 2,000円+税 ISBN 978-4-385-13580-9)